

# 『和泉式部日記』に於ける消息の特殊性

—係助詞ゾ・ナム・コソの用法をめぐって—

松 岡 千賀子

[キーワード：①『和泉式部日記』 ②消息 ③係助詞 (ゾ・ナム・コソ)]

## 1. はじめに

『和泉式部日記』（以下『和泉』）は、和泉式部と敦道親王の恋愛を題材とした日記であり、贈答歌を中心に二人の揺れ動く感情が綴られている。歌人としても名高い式部ゆえ、これまでの研究において歌に関する考察は枚挙に暇がない<sup>1)</sup>。しかし、男女の対面する機会が限られていた当時、消息もまた31文字では言いつくせぬ思いを託す重要な伝達手段であったはずである。こうした消息中の表現から二人の関係を紐解くべく、手がかりとして係助詞ゾ・ナム・コソの使用率を分析した結果、『和泉』の用法には平安時代の一般的傾向とは異なる特徴のあることが確認できた。

従って本研究では、同時代の女流日記であり、恋愛という共通テーマを持つ『蜻蛉日記』（以下『蜻蛉』）や、平安時代を代表する物語であり、登場人物・消息数共に多い『源氏物語』（以下『源氏』）の消息中の係助詞と比較することによって、その特性を考察してみることにする。

## 2. これまでの研究

係助詞ゾ・ナム・コソの関係については、富士谷成章〔1773〕等によってコソ>ゾ>ナムという強調度合が指摘され、ゾは「叙述する」（長尾高明〔1987〕等）、ナムは「相手に向かって穏やかに説明」し「『礼儀のわきまえ』を表明する」（大野晋〔1993〕等）、コソは「極めて感情的な強調」（大野晋〔1956〕）「主観的に判断する」（林田明〔1975〕等）「最上位・随一のものとして、他の対象を排してとりたてる」（森野崇〔1988〕）、といった性質が様々な視点で論じられてきた。

係助詞の文体別研究では、日記随筆にゾ、物語にナム・コソが多く、地はゾが中心であるもののジャンルによって傾向が異なる（日記はゾが多い）こと、会話はナム・コソ、心話はコソの多いこと、歌はコソが多くナムはほとんど使われないことが永井泷〔1938〕・宮坂和江〔1952〕等によって考察されてきた。しかし管見のかぎりでは、3文

体別分類が9割強を占め、消息の扱いを明示している研究は少ない<sup>2)</sup>。

個々の作品を対象とした研究としては、『蜻蛉』中の3助詞を地・会話（「消息含む」と明記）・心話の3文体に分類し、ゾが地に多いこと、ナムは会話（特に結びを省略した用例）に多いこと、コソは会話・心話に多いことを指摘した伊牟田経久〔1981〕や、『源氏』中の3助詞を地・会話・消息・心話・歌に分類してナムの伝達性に注目し、「『なむ』が和歌に用いられないのは、心話文に『なむ』が見られないと同様」で「具体的な聞き手の存在を前提とし、その聞き手に対してもちかけられるこの助詞の性質に求められる」とした森野崇〔1987〕、同様に『源氏』（若菜上・下）を地・会話・心話に分類し、『伊勢物語』との傾向の類似性を述べた山口雄輔〔2002〕等がある。

### 3. 研究方法

係助詞ゾ・ナム・コソを以下の①～⑦の方法で分類（本文末に表示）し、考察した。

#### ①平安19作品に於ける4文体別係助詞の実数表 …【表1】

平安19作品（『竹取物語』『土佐日記』『伊勢物語』『平中物語』『大和物語』『多武峰少将物語』『篁物語』『宇津保物語』『蜻蛉』『落窪物語』『和泉』『枕草子』『源氏』『紫式部日記』『堤中納言物語』『夜半の寝覚』『浜松中納言物語』『更級日記』『狭衣物語』）を対象として3助詞を4文体別（地・消息・会話・心話・歌は除く<sup>3)</sup>）に分類し、実数を表示した。

#### ②平安4期に於ける係助詞の文体別出現率（%）表 …【表2】

①の19作品を4期<sup>4)</sup>（Ⅰ期：『竹取』～『平中』、Ⅱ期：『大和』～『落窪』、Ⅲ期：『和泉』～『紫』、Ⅳ期：『堤』～『狭衣』）に分類し、各期の文体別出現率を算出した。

#### ③平安4期の係助詞変遷グラフ …【グラフ】

②の結果を棒グラフで表示した。

#### ④『和泉』の消息に於ける対人別係助詞表 …【表3】

『和泉』<sup>5)</sup>の消息中の3助詞数を対人別に表示した。

#### ⑤『和泉』の会話に於ける対人別係助詞表 …【表4】

『和泉』の会話中の3助詞数を対人別に表示した。

#### ⑥『蜻蛉』の消息に於ける対人別係助詞表 …【表5】

『蜻蛉』<sup>6)</sup>の消息中の3助詞数を対人別に表示した。

#### ⑦『源氏』の消息に於ける対人別係助詞表 …【表6】【表7】

『源氏』<sup>7)</sup>の消息中の3助詞数を、光源氏が「書き手」または「読み手」となっている消息の内、相手が女性であるものを対象として対人別に表示した。

#### 4. 『和泉』消息中の係助詞の用法

【グラフ】から、『蜻蛉』『和泉』『源氏』の成立時期にあたる平安Ⅱ・Ⅲ期の平均的な用法として、地はナム→ゾ、消息はナム、会話はナム・コソ、心話はコソの多いことがわかる。消息は対人意識（敬意）を必要としながら、相手と時空間を共有しない（直接反応を見ることのできない）表現手段である。従って慎重な気遣いを必要とするため、「穏やか」で「礼儀のわきまえ」を表すナムが好まれ、3助詞の中で最も「感情的」で「主観的」なコソは使われにくい傾向にあったと推察できる。

しかし【表3】【表4】が示す通り、『和泉』の消息（親王・式部間の贈答）では、会話以上にコソの使用率が高い。しかも時の経過を追って調べてみると、贈答の繰り返しを通じて気心が知れ、関係が深まるにつれてナムからコソへと変化しているわけではなく、親王の最初の消息中で早くもコソが使われているのである。2人の消息は後朝（ア）から始まり、その後会えぬままの贈答が続く中で、やがて（イ）のように双方コソの用例へとつながっていく。贈答の内、共に係助詞を用いた消息は6例、内2例（イ）（ウ）が双方コソ、1例（エ）が双方ナム、2例（オ）（カ）が親王・ナム、式部・コソである。全体から見て敦道親王も消息にコソを好む傾向があるが、式部は親王以上にコソの使用率が高く、ナムを用いた用例は8例中2例に止まる。永井〔1938〕や宮坂〔1952〕が「歌はコソが多くナムはほとんど使われない」と指摘している点から考えると、『和泉』には歌を含む消息が多いため、散文部分も歌の延長のような感覚で書かれているということであろうか。あるいは、コソが「感情的」（大野晋〔1956〕）で「主観的」（林田明〔1975〕）という観点から、式部にとっての消息は、会話以上に感情を率直に吐露しやすい表現手段であり、より心話に近いものであった、とも解釈できる。

（ア）「今のほどもいかが。あやしくこそ」〔親王→式部〕（90）

（イ）「をりすぎてさてもこそやめさみだれて今宵あやめの根をやかけまし  
とこそ思ひたまふべかりぬれ」〔式部→親王〕

と聞こえて参りて、三日ばかりありて帰りたれば、親王より

「いとおぼつかなくなりにはければ、参りてと思ひたまふるを、いと心憂かりしに  
こそ、ものうくはづかしうおぼえて。いとおろかなるにこそなりぬべけれど、日  
ごろはすぐずをも忘れやするとほそふればいと恋しさに今日はまけなむあさから  
ぬ心のほどを、さりとも」〔親王→式部〕（93）

（ウ）「昨日の御気色のあさましうおほいたりしこそ、心憂きものあはれなりしか」  
〔親王→式部〕とのたまはせられたれば、

「葛城の神もさこそは思ふらめ久米路にわたすはしたなきまで  
わりなくこそ思ひたまうるれ」〔式部→親王〕（128）

- (エ) 「ただ今いかが。水見になむ行きはべる。  
 大水の岸つきたるにくらぶれど深き心はわれぞまされる  
 さは知りたまへりや」〔親王→式部〕御返  
 「今はよもきしもせじかし大水の深き心は川と見せつつ  
 かひなくなむ」〔式部→親王〕(97)
- (オ) 「あけざりしまきの戸口に立ちながらつらき心のためしとぞ見し  
 憂きはこれにやと思ふも、あはれになむ」〔親王→式部〕(中略)  
 「いかでかはまきの戸口をさしながらつらき心のありなしを見む  
 おしはからせたまふめるこそ。見せたらば」〔式部→親王〕(94)
- (カ) 「今朝したり顔におほしたりつるも、いとねたし。この童殺してばやとまでなむ。  
 朝日影さして消ゆべき霜なれどうちとけがたき空の気色ぞ」〔親王→式部〕  
 とあれば  
 「殺させたまふべかなるこそ」〔式部→親王〕(124)

## 5. 『蜻蛉』消息中の係助詞の用法

兼家・道綱母間の贈答は【表5】が示す通りナムが大半を占める。これは当時の一般的傾向と一致し、4.で確認した『和泉』とは明らかに異なっている。『蜻蛉』中、道綱母が兼家への消息でコソを使っているのは次の2例のみである。

- (キ) 「『身をし変へねば』とそ言ふめれど、前渡りせさせたまはぬ世界もやあるとて、  
 今日なむ。これもあやしき間はず語りにこそなりにけれ」〔道綱母→兼家〕(115)
- (ク) 「御前申しこそ、御いとまのひまなかべかめれど、あいなけれ」〔道綱母→兼家〕  
 (151)

(キ)は、道綱母がコソを用いた最初の用例である。彼女が鳴滝に旅立った際の消息であり、兼家のいない世界へ行ってしまうとする強い決意が表れていると解釈できる。道綱母は、通いの途絶えがちな兼家を皮肉り、抗おうとしていた印象が強いが、係助詞の用法を見る限り語感のやわらかい表現が多く、「礼儀のわかまえ」を忘れずに対応していたことが伺える。表面的には兼家を批判しつつも、思いを断つことはできず、なんとか繋ぎ止めたいと願う女心が根底に潜んでいたと考えられる。

## 6. 『源氏』消息中の係助詞の用法

『源氏』では、全部で226通の消息が贈答されているが、本研究では光源氏を「書き手」または「読み手」とする消息の内、相手が女性（恋愛関係の有無は問わない）の消息に

対象を絞って考察する。

【表6】【表7】から分かるように、光源氏を書き手または読み手とする消息も、大半は『蜻蛉』同様ナムが使われておりコソの用例は少ない。特に女性が書き手の用例は少なく、光源氏への消息中、コソが用いられているのは次の3例にすぎない。

(ケ) 「うけたまはり悩むを、言に出でてはえこそ、

問はぬをもなどか問はでほどふるにいかばかりかは思ひ乱る  
益田はまことになむ」〔空蟬→光源氏〕〔空蟬 1-263〕

(コ) 「なほ現とは思ひたまへられぬ御住まひを承るも、明けぬ夜の心まどひかとなん。  
さりとも、年月は隔てたまはじと、思ひやりきこえさするにも、罪深き身のみこそ、  
また聞こえさせむこともはるかなるべけれ。(以下略)」〔六条御息所→源氏〕  
(須磨 2-185)

(サ) 御文には、いとかうばしき陸奥国紙の、すこし年経、厚きが黄ばみたるに、  
「いでや、賜へるは、なかなかこそ。

きてみればうらにられけり唐衣かへしやりてん袖をぬらして」  
御手の筋、ことに奥よりにたり。いといたくほほえみたまひて、(以下略)〔末摘  
花→光源氏〕〔玉鬘 3-131〕

(ケ)は、空蟬が源氏の病を耳にし、伊予国に下向する前に送った消息、(コ)は、六条御息所が遠い須磨の寓居にいる源氏のもとに送った消息であり、いずれも別れを伴う状況下で書かれている。その上、書き手の2人は『源氏』の女性達の中でも「拒絶」「気位」といったある種の「強さ」を持つという点で共通する。一方(サ)は、源氏に正月の衣装を贈られたことに対する末摘花の礼状である。歌の内容から紙の選択・筆跡に至るまですべてが失笑の対象となっており、普通の姫君とは異なる特性を感じさせている。ナムを用いずコソを選んだ文面にも、そうした彼女らしさが表れていると言えるだろう。

## 7. おわりに

以上の結果から『和泉』の消息(式部本人の消息)は、係助詞の用法という点から考察すると、コソが多いという特性を持つことが確認できた。消息は相手と時空間を共有しない(相手が目の前にいない)ため、会話以上に気遣いを必要とする意志伝達手段である。特に女性が男性に消息を贈る場合、平安時代には「穏やか」で「礼儀を重んじる」ナムが一般的であったにも関わらず、式部は3助詞の中で「最も強く」「主観的」なコソを好んだ。このことから式部は、消息でも特に遠慮することなく、湧き起こる感情をそのまま素直に吐露していた(=心話に近い表現を用いていた)ことがうかがえる。兼家の訪れ(対面・有)をひたすら望み、消息は二義的な手段(対面・無=愛情の衰への

証)と捉えていた道綱母に対し、式部と親王は、逢えない状況下でも消息の贈答を通じて互いの愛情を確かめ合い、絆を深めていった。つまり式部にとっての消息は、二人の愛を育む重要な役割を担っていたのである。そうした消息の位置づけの違いが、係助詞の用法にも表れていると考えられる。今回は、あくまでも係助詞という視点からの見解に止めるが、これを端緒として今後さらに他の用語も分析し、『和泉』に於ける消息の意義について考察を深めていくつもりである。

【表1】 平安19作品に於ける4文体別係助詞の実数表<sup>8)</sup>

≡≡≡ 「ぞ」が最も多い    ■ 「なむ」が最も多い    ■ 「こそ」が最も多い

	地			消息			会話			心話										
	ぞ	なむ	こそ	ぞ	なむ	こそ	ぞ	なむ	こそ	ぞ	なむ	こそ								
竹取	11	>	9	>	0	≡	1	=	1	18	<	23	>	18	2	>	0	=	0	
土佐	53	>	12	>	2	0	0	0	6	>	1	≡	2	0	0	0				
伊勢	10	<	66	>	4	0	<	3	>	1	2	<	4	>	2	1	≡	0	<	2
平中	106	>	14	>	3	4	=	4	>	0	23	>	21	>	3	1	≡	2	<	7
大和	15	<	238	>	1	2	<	13	>	1	13	<	41	>	4	1	=	1	≡	2
多武	11	<	21	>	2	6	<	24	>	15	4	<	8	≡	7	1	≡	0	<	2
篁	9	≡	10	>	0	1	<	3	>	1	7	>	3	<	7	0	0	0		
宇津	72	<	84	>	5	0	0	0	298	<	785	<	1018	22	>	1	<	63		
蜻蛉	237	>	38	>	19	14	<	95	>	20	36	<	108	>	33	18	>	3	<	23
落窪	28	<	78	>	3	5	<	49	>	11	164	<	219	=	219	20	>	2	<	21
和泉	21	>	1	=	1	6	<	16	<	20	9	<	14	≡	15	6	>	0	<	18
枕	240	>	21	<	335	1	<	11	>	1	107	>	80	<	121	1	≡	0	<	2
源氏	942	>	294	>	173	2	<	123	>	31	150	<	1367	>	1190	78	>	11	<	428
紫	109	>	8	<	44	0	≡	1	=	1	2	<	10	>	8	2	>	0	<	3
堤	41	>	13	=	13	3	=	3	<	6	55	>	23	<	66	7	>	0	<	9
寝覚	176	>	13	<	53	(2	<	9	>	5)	74	>	79	<	237	77	>	4	<	173
浜松	77	>	5	<	44	(3	<	10	>	7)	65	>	66	<	120	44	>	8	<	139
更級	29	>	3	<	9	0	<	3	>	0	7	<	16	>	14	2	>	0	<	4
狭衣	353	>	13	<	80	(2	<	8	=	8)	154	>	69	<	360	105	>	10	<	158
						[152					61				352]					

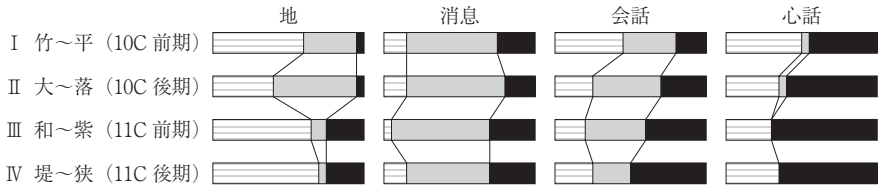
【表2】 平安4期に於ける係助詞の文体別出現率（%）表

≡≡≡ 「ぞ」が最も多い    ■ 「なむ」が最も多い    ■ 「こそ」が最も多い

	地			消息			会話			心話										
	ぞ	なむ	こそ	ぞ	なむ	こそ	ぞ	なむ	こそ	ぞ	なむ	こそ								
I 竹～平	58.2	>	39.2	>	2.6	16.7	<	58.3	>	25.0	42.8	>	36.2	>	21.0	47.8	>	6.7	<	45.6
II 大～落	39.4	<	57.5	>	3.1	12.9	<	68.6	>	18.5	24.4	<	44.2	>	31.4	34.3	>	7.5	<	58.2
III 和～紫	66.6	>	8.4	<	25.0	6.0	<	62.7	>	31.3	18.5	<	40.8	>	40.7	28.4	>	0.5	<	71.1
IV 堤～狭	69.0	>	7.8	<	23.2	12.7	<	55.1	>	32.1	26.0	>	22.6	<	51.4	33.8	>	1.9	<	64.3

【グラフ】 平安4期の係助詞変遷グラフ

≡≡≡ ぞ    ■ なむ    ■ こそ



【表3】 『和泉』の消息に於ける対人別係助詞表

書き手	読み手	ぞ	なむ	こそ
親王	式部	6	12	14
式部	親王		2	6
春宮女御	北の方		1	
北の方	春宮女御		1	
合計		6	16	20

【表5】 『蜻蛉』の消息に於ける対人別係助詞表

書き手	読み手	ぞ	なむ	こそ
兼家	道綱母	7	35	6
道綱母	兼家	4	20	2
道綱母	道綱		1	1
道綱母	登子			1
道綱母	父		2	
道綱母	遠度		6	4
道綱母	侍女	1	1	
道綱	大和の女		1	
遠度	道綱母		11	3
遠度	道綱		2	
遠度	養女		3	
登子	道綱母	2		
親族	道綱母		3	
親王	兼家			2
京のあれこれの人	兼家		2	
師氏	道綱母			1
侍女	道綱母		4	
侍女	侍女		3	
八橋の女	道綱		1	
計		14	95	20

【表4】 『和泉』の会話に於ける対人別係助詞表

話し手	聞き手	ぞ	なむ	こそ
親王	式部	4	6	3
式部	親王	1	3	3
親王	乳母			1
式部	童	1		1
乳母	親王	1		3
人々	親王		1	
童	親王		1	
童	式部		2	
桶洗童	式部		1	
女房達	女房達	2		2
小舎人童	桶洗童			2
計		9	14	15

【表6】『源氏』の消息に於ける対人別係助詞表  
(光源氏→女性)

書き手	読み手	ぞ	なむ	こそ
光源氏	明石君		2	
光源氏	秋好中宮		1	
光源氏	朝顔齋院		1	
光源氏	空蟬			1
光源氏	朧月夜		2	3
光源氏	玉鬘		1	2
光源氏	藤壺		1	1
光源氏	紫上		3	1
光源氏	六条御息所		4	2
光源氏	藤壺女房		4	
光源氏	夕霧祖母		1	
光源氏	朝顔女房		1	
光源氏	葵上母		3	1
光源氏	紫上祖母		1	
光源氏	紫上邸人々		1	
計		0	26	11

【表7】『源氏』の消息に於ける対人別係助詞表  
(女性→光源氏)

書き手	読み手	ぞ	なむ	こそ
明石君	光源氏		1	
秋好中宮	光源氏		1	
空蟬	光源氏		1	1
朧月夜	光源氏		2	
玉鬘	光源氏		1	
紫上	光源氏		1	
六条御息所	光源氏		2	1
末摘花	光源氏			1
藤壺女房	光源氏		1	
葵上母	光源氏		1	
朝顔女房	光源氏		1	
少納言乳母	光源氏		1	
紫上祖母	光源氏		1	
計		0	14	3

## 注

- 1) 藤岡忠美 [1969]・木村正中 [1976] 等がある。
- 2) 消息を独立した文体として扱っている研究に若林 [1961]、森野 [1987]。3分類ながら消息の扱いについて明記している研究に伊牟田 [1981]、井上・辰巳 [1982] がある。
- 3) 歌中の係助詞は、消息中の歌も含めすべて調査対象から除いて分類する。
- 4) 区分の基準は、Ⅱ期：地で「なむ」が優勢の時期、Ⅲ期：国語学上の変遷期、Ⅳ期：会話で「なむ」が劣勢となった時期、とした。結果的に、この4期は約50年単位の平均値となっている。
- 5) 本文は『和泉式部日記』（日本古典文学全集（旧）・小学館）に拠る。引用本文末尾の〔 〕は〔書き手→読み手〕、（ ）は頁数を表す。
- 6) 本文は『蜻蛉日記』（完訳日本の古典・小学館）に拠る。引用本文末尾の〔 〕は〔書き手→読み手〕、（ ）は頁数を表す。
- 7) 本文は『源氏物語』（日本古典文学全集・小学館）に拠る。引用本文末尾の〔 〕は〔書き手→読み手〕、（ ）は全集の巻数－頁数を表す。
- 8) 『宇津』は3文体分類（地・会話・心話）の小久保 [1965]。（消息の扱いについての記述がないため、仮に0と記入。）



『源氏』は4文体分類の森野〔1987〕。

『寝覚』『浜松』『狭衣』は「会話に消息を含む」と明記した山口〔1985b・1986・1983〕の数値を使用。}消息=松岡数値、【 】の会話=「山口(会話〈含む消息〉)マイナス松岡(消息)」、【 】無の会話・地・心話=山口数値。}

## 参考文献

- 井上章子・辰巳順子(1982)「『今昔物語』の係助詞ゾ・ナム・コソの文体論的考察」『大谷女子大国文』12
- 伊牟田経久(1981)「ゾ・ナム・コソの差異—蜻蛉日記を中心に—」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店
- 大野晋(1956)「日本古典文法(四)—その一『コソ』の係り結び(四)—」『国文学解釈と鑑賞』21
- 大野晋(1993)『係り結びの研究』岩波書店
- 木村正中(1976)「和泉式部日記形成論」『源氏物語と女流日記 研究と資料』武蔵野書院
- 小久保崇明(1965)「大鏡の結びについて」『季刊文学・語学』35
- 此島正年(1966)『国語助詞の研究』桜楓社
- 永井洸(1938)「係助詞「ぞ」「なむ」「こそ」の本質意義に就いて」『国文学攷』4
- 長尾高明(1987)「古文解釈と助詞—強調表現について—」『国文法講座』3 明治書院
- 林田明(1975)「『係結』の言語生態論的研究」『千葉大学人文研究』4
- 藤岡忠美(1969)「王朝女流日記と和歌—和泉式部日記を中心に」『国文学』14
- 富士谷成章(1773)『あゆひ抄』『国語学叢書』2
- 宮坂和江(1952)「係結の表現価値—物語文章論より見たる—」『国語と国文学』29
- 森野崇(1987)「係助詞「なむ」の伝達性—『源氏物語』の用例から—」『国文学研究』92
- 森野崇(1988)「係助詞「こそ」の機能—『源氏物語』を資料として」『早稲田大学教育学部学術研究』37
- 山内洋一郎(1992)「平安時代の連体形終止」『古代語の構造と展開』和泉書院
- 山口雄輔(1983)「『狭衣物語』の係り結び—係助詞の分布調査とその型—」『国学院高等学校紀要』13
- 山口雄輔(1985a)「流布本『狭衣物語』の係り結び—係助詞の分布とその型—」『文教大学国文』14
- 山口雄輔(1985b)「『夜の寝覚』の係り結び—係助詞の分布とその型—」『国語研究』49

山口雄輔（1986）『『浜松中納言物語』の係り結び—係助詞の分布とその型—』『文教  
大学教育学部紀要』20

山口雄輔（2002）『『源氏物語』係結考—「若菜上」における—』15

山口雄輔（2002）『『源氏物語』係結考—「若菜下」における—』31

若林邦枝（1961）『落窪物語小考—消息文について—』『女子大國文』22

（まつおか・ちかこ 1999年博士後期課程単位取得退学）